

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Aijima dialect accent

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清水, 誠治, SHIMIZU, Masaharu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001975

安居島方言アクセントについて

清水 誠 治

(東京都立大学大学院)

キーワード

瀬戸内海島嶼部方言, 安居島, アクセント, 中輪式, 中央式

要 旨

愛媛県北条市安居島のアクセントについて、特徴的な現象を中心に報告し、分析を加える。特に、尾高型の変化と、特異な下降音調に関してはやや詳しく見ていく。その結果、この島がかつて中央式から中輪式への変化が起こり、それが完全に終わっていないのが現在の状態なのではないかという見方が出来る。そして、この変化は、移住という史実とも符合するものであることを述べる。

1. はじめに

安居島(あいじま)は、愛媛県北条(ほうじょう)市の北西約12キロ沖合の瀬戸内海に浮かんでいる、世帯数約40、人口約70人の小さな過疎の島である。

安居島の歴史は比較的浅く、無人島であったこの島に入植が始まったのは、江戸中期の文化14年で、四国本島の浅海(あさなみ)・下難波(しもなんば)(いずれも現在の北条市)辺りの人々を中心となって移住してきたと伝えられている。その後、島の開墾が進んでからは、越智(おち)郡の岩城島(いわぎじま)からも移住者があったようである。

石炭輸送船で瀬戸内海が賑やかだったころは、風待ち・潮待ちの良港として栄え、船員相手の遊廓があり、遠く九州からも遊女が集まって来ていたというが、時代はめぐり、今では小さな島故に産業は育たず、小学校は昭和51年度で廃校。釣り人や、夏にキャンプや海水浴の学生が来る他は訪れる人もない¹。

西瀬戸の島嶼部のアクセントについての調査報告は、現在、本四連絡橋の尾道～今治ルート建設が進む越智郡辺りにについては、かねてより四国系か中国系かということで研究者の興味をひき盛んであったが、それより西側の地域については、中央から遠いせいもあるか、遅れている。安居島についても例外ではない。

本稿では、この安居島方言のアクセントについての記述を主眼とし、そこに見られる特徴的な現象の分析を中心に話を進める。特に、尾高型の変化と、特異な下降音調についてはやや詳しく見ていく。

この方言アクセントには、中輪式と中央式との中間的様相がみられ、それらの大半は、中央式アクセントに特有の現象であったり、中央式がその特徴を失う過程で生じたと考えられる現象が種々の形でゆれとなって現れるというもので、そのゆれの要因が分かってくると、中輪式の体系にきわめて近い形に見えてくる。

このことから、この島では、かつて中央式から中輪式への変化が起こり、現在は、それがまだ完全には終了していない状態なのではないかという見方が出来る。そして、このことは、移住という史実にも符合するものであることを述べる。

2. 調査について

安居島のアクセントを教えて頂いたのは、島で唯一の旅館を営んでおられる岡井肇(おかいはじめ)氏(明治40年生まれ)である。ご両親・奥様ともに安居島の方。小学校の高等科は北条へ通われ、また、お若い頃は北方のアリュージョン方面などへ漁に出られたこともあるそうだが、その他はずっとこの島で暮らして来られた方である。岡井氏には、1996年5月29日・8月8日の二度の臨地調査(いずれも日帰り)と、12月19日に電話での確認調査に応じて頂いた²。一人の話者からの情報ということで不安は残るが、各調査時に疑問となった点や、気になっていた現象は、気づいた範囲で次の調査で確認をとるようにした。

調査票は、最初の調査が、文部省重点領域研究「日本語音声」の「全国共通項目調査票1990年5月改訂版」から抜粋したもの。二回目は、上野善道氏の私家版「アクセント分布調査票(A)」および、複合語については、上野善道(1995)(1996a)の中の調査項目を参考に私的に編んだもので、読み上げ式の調査を主体とした。当方言アクセントは、筆者が観察し得た限りにおいては、読み上げ式と自然談話での発話スタイルによる実現型の相違はないと見られることから、必要に応じて自然談話のデータからも若干の語を考察の対象に加える。

本稿に関わる調査語数は以下の通りである。

1 拍体言=51語, 2 拍体言=452語, 3 拍体言=426語, 4 拍体言=246語, 5 拍体言=131語,
6 拍体言=92語, 7 拍体言=45語, 8 拍体言=4語, 9 拍体言=2語, 2 拍動詞=38語,
3 拍動詞=68語, 4 拍動詞=25語, 5 拍動詞=21語, 6 拍動詞=3語, 2 拍形容詞=2語,
3 拍形容詞=40語, 4 拍形容詞=10語, 5 拍形容詞=8語

「体言」には、名詞のほか、副詞・接続詞、および形容動詞とサ変動詞の語幹も含む。俚語形で出た分についても、それぞれの拍数に合わせて数に入れる。動詞・形容詞については、終止形の数を示す。他の活用形についても一部の語について尋ねているが、本稿では関係しない。

なお、紙幅の都合からデータをすべて示すことは出来ないが(別稿を予定)、用例は出来るだけ本文中に挙げるようにした。

3. 表記と用語について

本稿で用いる記号等について述べておく。

○…任意の自立語の拍, ▽…任意の付属語の拍(格助詞「が」など)

「…大幅な上昇, '…下降, ”…拍内下降

H=高起, L=低起

便宜的に、他の文献から引用した部分についても、勝手ながら上記の記号に統一する。本稿では、分析の対象が、短い拍数の語から多拍語にまで及ぶことがあるため、便宜的に、実現型は核

の有無と位置を数字に置き換えて示す方法を採用。すなわち、0型(=平板型)、1型(=頭高型)、2型(=2拍なら尾高型、3拍なら中高型)、…といった具合である。また、単独形にのみ現れる、語末の拍内下降は「F」に置き換え、2F型(=○○^F)、3F型(=○○○^F)のように簡単に記す。そして、いわゆる高起低起の式の対立のある場合は、中央式諸方言について一般的に用いられている、式の出方(H/L)に核の有無/位置を示す数字を組み合わせて示す方法、すなわち、H1型(=高起頭高型)、L0型(=低起平板型)、…を用いる。なお、これも便宜的に、-1型(=…○○^F▽)、-2型(=…○^F○▽)のように、核の位置を後ろから数えた数値で示す、いわゆる逆算指定を行うことがある。また、ここでいう「型」は実際に発音された下降の位置を表示するものである。

4拍までの名詞については、概ね発話環境をかえて尋ねており、それを以下のように呼ぶ。

環境	例	呼び方
単語単独	車。	単独形
助詞(主として格助詞「が」)付き	車が。	文節形
文節形に述語文節を続けた形	車が多い。	短文形

三通りのデータがそろっていない語もあるが、分析に支障のない場合は一々断わらない。また、当方言では、無アクセントなど、実現型が句の長さによって左右されるような方言と違い、文節形と短文形で体系的な相違が見られることはないので、「文節/短文形」(文節形または短文形)、「文節・短文形」(文節形と短文形)のように、まとめて表記することがよくある。

4. 安居島方言のアクセント

特徴的な現象を中心に見ていく。

4.1. 句頭の音調

0型と3拍目以降に下げ核のある型の句頭の音調には、次の3つのパターンがある。なお、a. a'. b. の記号は、あくまで便宜的なもの。

a. 「○○○…

風が、狐、二十日(はつか)が、一生、分解、ミックスジュース、歌う、…

a'. ○「○○…

水が、車、女が、七月、遊ぶ、明るい、…

b. ○○「○…=OMO… (M=ン, ッ, イ<母音連続の後半部分の>, N.<狭母音の無声化>)

全用例をあげる。Mの中身を分けて示す。拍数の短いものから五十音順で並べる。読みや補足事項は()に入れて示す。▲はa.との併用を確認している語(ただし、併用例は確認している語のみ。以下同じ)。

ン…匏(かんな)、田んぼ、▲とんぼ、▲団子、人参、三年、三本柱、戦後、本当、三番目、何曜日、考え事

ッ…三つ(副詞的用法で)、一緒、コップ、出社、▲ノッポ、列車、一寸、一杯(数詞)、学校、結婚、特急、松茸、めったに(副詞)、復興、一週間、一寸法師、結婚相手、

特急列車, 特急電車

イ…財産

N。…たすき, 暑さ, 学生, 局長, 東風(こちかぜ)

他に, 「包み(2型との併用あり), 食料品」の2語(いずれも2拍目は狭母音)もこれで実現³。

量的には $a. \approx a'. > b.$ 。a. と a'. との違いは任意のようである。ただ, 2拍目がモーラ音素の場合に a'. では出にくい。また, 語の長さ, 句の長さによってある程度左右されるようで, 多拍語ほど a'. が多い。ゆっくり丁寧に発音したかどうかといった, 発話スタイルの事情はあまり関係ないようである。従って, a'. は a. の音声的変種と考え, 以下は, a. に含めて見ていく。

b. の高い部分は, やや押さえ気味に実現される。また, これらのちがいは, あくまで句頭のもので, 決して語(文節)頭のそれではない⁴。その証拠に, 句中では先行文節の最後部拍の高さに同化する。b. で出る語は, 2拍目が音声的に弱い環境のものに限定されているわけだが, 同じ環境でも, a. でしか出ない語があることから, 音環境とは別に要因がありそうである。以下, 体言について, 1/2型以外で, 2拍目がモーラ音素および母音の無声化した拍の語を整理してみる。併用もそれぞれ1例ずつにカウントする。

用例数

	ン	ツ	ー	イ	N。	合計
a. (a'.)	47	10	72	28	6	163
b.	13	19	なし	1	6	39
合計	60	29	72	29	12	202

「ン」は a. で出やすいと思われるが, それでも b. に13例(約22%)ある。また, 「ツ」・「N。」の場合は b. で出やすいと思われるが, それでも a. がかなり出ている。

調査語数自体が少なく, 判断には危険が伴うが, 「ン」で b. で出る語, 「ツ」・「N。」で a. で出る語について, 高く始まるか低く始まるかという点だけを見れば, 高起低起の対立の性質に共通していることから, 試しに松山市や安居島の対岸の北条市浅海(あさなみ)などの中央式の地域と比較してみる。松山は, 一部は筆者の調査だが, ほとんどは上野善道(1995, p.16-30), 秋山英治(1996, p.59-72)の資料を参考にした。浅海は, 筆者の調査による⁵。

	安居島	松山	浅海
三日	「ミツカ	H0	H0
明日(副詞)	「アシタ'	H0	H0
田んぼ	タン「ボ	L0	L0
何曜日	ナン「ヨービ	L3	L3
:	:	:	:

式音調の出方にそれぞれが対応している場合が多いという傾向がある。すなわち, 「a. =高起, b. =低起」という対応である。浅海方言についてのみだが, ここで数えた全用例から, 144語(約71%, 安居島で0型あるいは3拍目以降に核がある型でも, 浅海で1型や2型の語(「女」「財産」など)

は除く)について確認をとったところ、109語(約76%)が対応しており、対応しないのは、「復興、特急、戦後」のような、日常頻繁には使われないと考えられるような語か、比較的新しく習得したと考えられる語に多いようである。そして、「ッ」は主として句頭が低く、「一」はもっぱら・「イ」「ン」も主として句頭から高く始まるというように、それぞれの音素が出やすい型で出ることが確かに多い。

この傾向は、複雑であり、何かの要因で後天的に獲得されたものとは考えにくい。従って、一昔前にあった高起低起の対立が消滅に向かう変化の過程での残骸が、このa./b.の傾向ではないかと思われる。古い特徴が、音声的に弱い環境でのみ残存していると考えられる現象は、珍しいことではない。共時的にも、モーラ音素など音声的に弱いものを含む音節内での上昇が嫌われる傾向は、多くの方言に共通してみられることである。

ただし、この現象は、中央式の高起低起の式の対立と違い、あくまで句のレベルで弁別されるものであり、また、ごく限られた音配列によって規定されるものである。そして、現段階では、その対立はかなりあいまいなもので、弁別性を失いかけていると考えられる。従って、句頭の上昇の位置の違いは確かに存在するものの、それは下げ核の実現に直接影響するものとは思われず、以下、下げ核の解釈を行う上では、一応切り離して考えて差し支えないと思われる。

4.2. 尾高型について

2拍名詞と3拍名詞をやや詳しく見、4拍名詞についても簡単に触れる。ここでは、単独形での出方に注目して話を進める。従って、単独形でのデータのない語は分析の対象から外す。

4.2.1. 2拍名詞

2拍名詞では、基本的に、単独形が[○○](=0型)または[○○"](=2F型)で出、文節形・短文形は[○○'▽](=2型)で出るといものである。

(1). 実現型の分布

・単独形が2F型

全用例を挙げる。ただし、◎の語は0型との、□印は[○'○"](この音調についての詳細は、4.3.1.に述べる)との併用がある。

鱈(あじ)、栗毬(いが)、石、音、◎型、紙、川、杭(「クエ」と発音)、◎橋、◎冬、◎町：2類

◎足、□犬、芋、色、◎花、豆、耳、山：3類

◎鞆(さや、ただし、話者は迷いながら答えた)：4類

萑(にら)、無理、わや(「駄目」の方言形)：類別語彙以外

合計23例

・単独形が0型

いくつか挙げる。用例数は、2F型の併用がある語も数えて、述べ語数を出す。

岩、北、夏、旗、昼、…：2類

足、馬、雲、海苔、綿、…：3類

仇、火事、癖、土手、土佐、…：類別語彙以外

合計38例

単独形での拍内下降の出る出ないについては、音配列・類・意味特性の観点から眺めても何か理由づけの出来る要因はなさそうで、むしろ調査の仕方の問題があり、出始めたら何語か連続して出、出なくなると何語かは連続して出ないという風であった。ただし、数語についてしか尋ねていないが、付属語を付けないで述語文節を付けた形、すなわち、「音聞こえる」のような形では、概ね、[オト”キコエル] のように出る。また、「この」に続けて1句で発音された場合は、[コノアシ” (足)] のように出ることが多かった。なお、「組、恥、晴れ、肥え、好き、酔い」のような有核型の動詞からの派生語は安定して0型で出る傾向がある。ちなみに、無核型(=0型)動詞からの派生語は、三つの環境を通じて0型。

(2). 文節末核の回避

中井幸比古(1990a,p.24)によれば、中央式では古くから「語末モーラの核(以下「語末核」)が嫌われ、消失する傾向」があり、とくに、[「〇〇”-「〇〇」(ここでいう2F型-0型)の変化の場合は、単独以外の環境では核が現れることから、『語末核』というより『文節末核』が嫌われる」という傾向が変化の理由として存在したことがあげられている。

また、中井幸比古(1990b,p.11)では、丹波地方でのいわゆる垂井式アクセントの成立に、この現象が関わっており、一つの方向として、A)。「文節末での無核型への変化…(中略)…文節末以外では核を保存する」(〇〇・〇〇’▽)、もう一つの方向として、B)。「環境と関係なく、次末モーラに核がある型への変化」(〇’〇・〇’〇▽)、さらに、B)’.への途中段階として、B’)。「文節末でのみ次末核型に変化し、それ以外では語末の核を保存している変化」(〇’〇・〇〇’▽)がある様子が考察されている(A).B).B’).の記号と()内の注記は、便宜的に筆者が付けたもの。

当方言の場合も、単独形0型と2F型の数比から見て、この語・文節末核が嫌われる現象(以下、便宜上、簡単に、「語末核回避」「文節末核回避」などと呼ぶ)、中でもA)が関わっており、単独形で次第に0型が増えていっているさなかの状態なのではないかと考えられる。

4.2.2. 3拍名詞

一方、3拍名詞では、二つのパターンが見られる。ひとつは、単独形では[〇〇〇](=0型)または[〇〇〇”](=3F型)で、文節/短文形では[〇〇〇’▽~](=3型)というものである。そして、もうひとつは、文節/短文形で3型でありながらも、単独形で2型で出るというものである。しかも、3F型との間でよくゆるる。

(1). 実現型の分布

・単独形2型(文節/短文形は3型)⁶

全用例を挙げる。◇印は3F型との、◎印は0型との、□印は[〇〇’〇”](この音調の詳細は、4.3.1.に述べる)との併用が確認された語。■は文節/短文形でも2型が併用されている語。

小豆、◇■女、◎■毛抜き、■東、◎二重、二人、◇娘：2類

頭、◇■うちわ、男、□刀、◇言葉、境、硯(すずり)、宝、◇助け、◇頼み、◇俵、◇なまず、◇縫い目、鉈、筵(むしろ)：4類

◇ざくろ、簾、情け：5類

嵐, トカゲ, 仲間, 南, ◇盲: X類 (金田一春彦氏が「どの類に入れていいか不明」とされたもの)
相手, ◇つくり (「刺身」の意味), 所, ◎西日, ◎鼻毛, ◎話, 混ざり, ◎弛み: 類別語彙以外

類別語彙では, 2・4類の大部分の語がこれである。数例しか尋ねていないが, 助詞を付けないで述語文節を続けた場合は, 概ね [○○〇〇~]。また, 「この~」のような形での句中では2型が出にくい。

・単独形0型 (文節/短文形3型)

全用例を挙げる。△印は2型との, ◇印は3F型との併用あり。

三日: 1類

△毛抜き, △二重, 二つ, 三つ: 2類

明日, 思い, 表, ◇鏡, ◇敵, ◇谷間, 包み, 光, 別れ: 4類

釣瓶, 係り, 数え, 構え, 細工, 尻尾, 上手(じょうず), 名残, △西日, △鼻毛, 本音, ムカデ, 屋敷, △弛み: 類別語彙以外

0型で安定している語は「三日, 三つ, 明日, 尻尾(しっぽ), 本音」のように, 2拍目がモーラ音素あるいは母音が無声化するため核を担いにくい語, また, 「思い, 包み, 光, 係り, 数え, 構え」のように, 有核型の動詞からの派生語に多い。なお, 2型との併用がある語は, 「毛抜き, 西日」のように, 「1拍+2拍」または「2拍+1拍」に分解可能な語(注6も参照)が多い。

・その他

単独形が3F型だけなのが「袋, 麓, 鉋」の3語。

(3) 文節末核の回避

まず, 「単独形2型, 文節/短文形3型」について見る。これは, 2拍名詞と同様, 文節末核回避の現象のうちの, B'. の変化(4.2.1.(2).参照)によるものと考えられる。すなわち, それぞれの発話環境ごとの実現型の数比から見て, 基本的には, ①. 「文節末核が回避されて単独形から2型化」が進み, そして, 文節/短文形でも2型がちらほら見られることから, ②. 「単独形2型にひかれて文節末以外の環境でも3型が2型化していく」方向⁷に向かって進んでいる状態と考えられる(○○〇〇・○○〇▽-○○'〇・○○〇▽-○○'〇・○○'〇▽)。

有核型の動詞からの派生語については, 多くが単独形0型で安定して出る。この分については, 2拍名詞と同じ, A'. の変化(4.2.1.(2).参照)が当てはまると考えられる。ところが, 次のような一部の例外がある。

単独形で2型あるいは3F型で実現されるのが「助け, 頼み, 鉢, つくり(「刺身」の意)」である。「つくり」以外は, 単独形で2または3F型をとる語が多い2・4類に属している。また, 2型で安定しているのが「匂い, 頼り」である。「匂い」は3拍目がモーラ音素であるため, 核を担いにくかったものと考えられる。「頼り」は「便り」の2型への類推が働いたものか。

また, 2型が現われる語は, 「鉢」のように, 類別語彙に入っているような古くからある語で, しかも具体的なものの名前であるなど頻用性のある語が多く, 0型で安定している語は「思い, 別れ」など, 抽象的な事柄を示す語に多いという傾向もある。

4.2.3. 4拍名詞

4拍名詞では、文節／短文形でも尾高型（4型）自体が少ない（約8%）。この場合の単独形は0型が圧倒的に多く、3型も少し含まれる。また、単独形で「○○○○」（＝4F型）がきかれるのは、「松茸」（3型と併用）と「二重眼（ふたえめ；「二重」の俚諺形。但し、文節／短文形でのデータを欠く）」の二語だけであった。調査語が少ないせいもあるかも知れないが、単独形における-1型と-2型（4拍では、4Fまたは0型と、3型）でのゆれは、2・3拍よりもずっと少ない。

単独形3型（文節／短文形4型）の全用例をあげる。

足音，八月，蛤（はまぐり），松茸，山道

「蛤」を除き「八月，山道」など「2拍＋2拍」の構造の語である⁸。

また、単独形0型で出る語は以下の通り。

一日（「イチンチ」と発音），弟，金持ち，かまきり（再調査では2型），小刀，七月，

十月，正月，年寄り（「トッショリ」と発音），縄跳び，餅つき，物置，六月，綿入れ

「七月，十月」などの月の名称⁹，「年寄り，綿入れ」など後部要素が動詞からの派生語の場合が多い。また，「一日（いちんち），弟」は，3拍目がモーラ音素であることから，核の移動が起こらなかったと見られる。「小刀」は，現在2型と3型の併用のみられる「刀」の古いと考えられる方の3型のアクセントが生かされたもので，希少な例と考える。あるいは，こうした語構成の語を更に調査すれば，データが増えるかもしれない。

4.3. 特異な下降音調

ところで，この方言では，以下に示すような特徴的な下降音調が聴かれる。

4.3.1. 二連続下降

イ'ヌ（犬），ムス'メ（娘），カタ'ナ'ガアル（刀が有る），ロー'ソ'ク'ガ（蠟燭が），

ホー'ガミ'エ'ル（帆が見える），アタマ'ガイ'タイ（頭が痛い），ヨロ'コ'ブ（喜ぶ）など

このように下降が連続して2度あると聴こえることが時折ある。とりわけ用言に，しかも句中に位置する場合に多くきかれるものである。ここでは，これを便宜的に「二連続下降」と呼び，12型，12F型，23型，23F型のように記す。

この音調は，山口幸洋（1963）（1972）で報告される遠江・奥三河などに聴かれる音調に似ていると思われる。山口氏はそれを，複合語に聴かれるものも含めた上で，“強調的な「くぎりの下降」と解釈されているようである。当方言においては，上記の例で「強調的」といえるのかどうか，また，いずれの例も切れ目は不明であって「くぎり」といえるのかどうかは疑問である。

ところで，当方言では，動詞・形容詞について，特に3拍語で句頭に位置する場合と句中に位置する場合とで次のような交替が見られる¹⁰。

・ミ'エ'ル／ウシ'ガミ'エ'ル（牛が見える）

・ワ'カ'イ'ヒ'ト'ワ…／コ'ノ'ゴ'ロ'ノ'ワ'カ'イ'ヒ'ト'ワ…（この頃の若い人は…）など

句頭の型は，東京・広島など中輪式アクセント一般の型に，句中の型は，松山・大阪など中央

式アクセント一般の型に下げ核の位置が共通するものであり、二つの型が環境を変えて共存している点が興味深い。通時的には、下降の遅れにより、[ワ'カイーワ'カイ] になる変化と見るのが自然で、その点からは、句頭の型の方が新しいということになる。

また、4拍用言では次のように句頭でゆれがみられる。

アカル'イ／アカ'ルイ（明るい）、ナガレ'ル／ナガ'レル（流れる） など

これも、一方が中輪式の型に、もう一方が、中央式の型に下げ核の位置が同じである。

こうした現象をヒントに、二連続下降を次のように解釈する。

当方言の二連続下降は、「過渡的な段階に起こる現象」¹¹ではないかと思われる。例えば、上記の[カタ'ナ'ガ〜]は、4.2.2.(3).でみた文節末核回避による3型から2型への変化の途上、一方、[〜ガイ'タイ]や[ヨ'ロ'コ'ブ]は、下降の遅れによる、1型から2型、2型から3型への、変化の途上の型とする考え。つまりは、下げ核の移動の変化に関わる現象と見るものである。

4.3.2. 複合語と形態素末下降

十分な調査ができていないが、複合語について、確認している範囲で後部3拍の名詞（前部要素は2拍以上、153語を対象とする）について概略示す。殆どが単独形でのデータ。用語・分析方法は上野善道(1992)(1995)(1996a)を参考にした。

殆どが-3型で出る。例外となるのは以下のように。漢字表記中の「+」は形態素の切れ目。

①. 様態性の前部要素を持つ／複合動詞からの派生語

大+嫌い、黒+砂糖、白+砂糖、中+だるみ、二+通り、一+通り／

通り+がかり、酔っ+ぱらい

…0型

②. 後部要素本来のアクセントが活かされている

女+詐欺師、十二+単衣 …-2型、裏+表 …-1型、仕掛け+花火、寒+椿 …-2,-3型でゆれ

「女詐欺師、十二単衣」が-2型で安定しているのに対し、「仕掛け花火、寒椿」はゆれる。他の-2型が期待される「一油、一心」などは-3型で出ている。馴染み度が関わっているものか。ただし、「女詐欺師」は「女+詐欺+師」と分割して意識した可能性もある。また、「十二単衣」は、〜ヒトエのヒの母音の無声化により-3型化が阻止されたことも考えられる。

③. 形態素の切れ目の直前の拍に下降

好き+嫌い、鯛+ご飯（自然談話より採取） …-4型、爪+楊枝 …-4,-3型でゆれ

このうち、「好き嫌い」については、前部要素の「好き」のアクセントが生かされていると見ることができるが、「鯛ご飯、爪楊枝」はそれでは説明できない。これらは、ちょうど形態素の切れ目の直前の拍に核がきているように聞こえるものである。形態素の切れ目に下がり目があるといえ、以下のような語も同様である。全用例を挙げる¹²。

イチゴ'アイス（苺+アイス）、オレンジ'ジュース（オレンジ+ジュース）、オンナ'ギ'ライ（女+嫌い）、

カン'ジュース（缶+ジュース）、キョーイク'テ'レ'ビ（教育+テレビ）、タイワン'リョ'ー'リ（台湾+料理）、

タマゴ'リョ'ー'リ（卵+料理）、テンブラ'ア'ブラ（天麩羅+油）、ネズミ'オ'ト'コ（鼠+男）、

バナナ'アイス（バナナ+アイス）、バナナ'ジュース（バナナ+ジュース）、ヒガシ'ド'ナ'リ（東+隣）、

ヒトバンド'マリ(一晩+泊り;自然談話より採取), ホージョー'ア'タリ(北条+辺り;自然談話より採取),
ミカン'ジュ'ース(蜜柑+ジュース), ムスメ'ゴ'コロ(娘+心), ヤサイ'ジュ'ース(野菜+ジュース),
リンゴ'ジュ'ース(林檎+ジュース), ワラ'ザ'イク(藁+細工)

これらの語は、形態素の切れ目で一度下がったあと、すぐ後ろの拍でもう一度下がっているように聴こえる。聴覚印象から、現象自体は、先に見た二連続下降と似ている。しかし、最初の下降=形態素の切れ目の直前にある下降を下げ核と捉えようとする、次のような矛盾が生じる。

これまでみてきたように、当方言では、モーラ音素は音声的に弱いものであり、アクセント核を担いにくい。なのに、[カンジュ'ース]の下線部の様な下降を下げ核と捉えることにするのはおかしい。従って、この下降は、本来的には下げ核とは区別されるものである可能性があるということと、特に、形態素の切れ目の直後にあるということから、ここでは、便宜的に「形態素末下降」と呼んでおく。

形態素末下降がきかれる語に共通する傾向として、後部要素の2拍目がモーラ音素(「ッ」を除く)の語が多いということがある。

この形態素末下降は、「切れ目の関与する現象」の一つで、二語から一語への(あるいは、アクセント的に二単位から一単位への)成熟の途中段階に生じた現象ではないかと思われる。

なお、これらのことから、「爪楊枝」「鯛ご飯」にきかれる下降は、聴覚印象の近似から下げ核と捉え-4型としたものだが、実は0型と解釈するべきかも知れない¹³。

4.3.3. 文節末下降

「文節末下降」の用語は山口幸洋(1996)より借用する。これも「切れ目の関与する現象」である。これは、上記のような音調とともに山口幸洋氏が頃に注目される現象で、静岡県内を中心に、山口幸洋(1959)(1987)等早くから報告がある他、山口幸洋(1996)では、遠江や伊豆、あるいは埼玉での実態が、一型アクセントとその周縁部に多いという地理的な分布の特異性の解釈の元に報告され、また、亀田裕見(1994)でも南伊豆町の実態が構造的な分析とともに報告されている。

筆者は、愛媛県内の八幡浜(やわたはま)市や明浜町(あけはまちょう)周辺で聴覚印象の似た音調を確認しているが、それについては、かつての高起低起の対立していた式が合流した際残った「低接性」の顕現したものと捉えている。八幡浜周辺でのこの音調は、一つの句で発音されれば、2回以上の下降もあり得る。そして、無核型文節の連続を中心にことごとく起こる(八幡浜では句中文節内に上昇があるが、明浜町ではない(句末文節以外は自然下降禁止)などの地域差がある)。

一方、安居島では、この下降は、自然談話も含めて観察した範囲では、句末文節の直前の文節末にのみ起こるようである。そして次の3タイプに細分される。

①. 下降の直後文節が中央式で低起

ハコガ'アル(箱が有る), ケタガ'アワ'ン(桁が合わない),

キョク'チョーニ'ナツチャ'ロ(局長になってやろう;自然談話より採取) など

「～ある」は殆どこの形。八幡浜周辺と音調的にも似ており、後続文節の低接性の残存か。

②. 引用の格助詞「と」抜き「言う」の前

サカナ'ユー'ジ'ジャ ナ'ア(「魚」という字だねえ), (「南風」は方言で)ヤマジ'ユー(「ヤマジ」という),
ミハラ'ユー'テア'ライ ナ'ア(「三原」という〈ところ〉があるよねえ) など

いずれも自然談話より採取。固定的に出る。中井幸比古(1996, p.397-398)によれば、関西の中央式でよくある現象らしい¹⁴。中央式では、「言う」は本来高起の系列だが、低接の“引用の「と」”が略された場合、「言う」がそのまま低接するという形で「と」の職能を補っているものと考えられる。だとすれば、この現象の成立には、“引用部分を明らかにする”という伝達の側からの要求が働いていたわけで、安居島ではこの現象が、かつての中央式からの体系的な変化が起こったあとも部分的に固定化して残ったと考えるのが自然だと思われる。

③. 下降の直前文節にフォーカス

コノ'ニ'ジ(この虹), コレガ'ホシ'イ(これが欲しい), ハチガ'トブ(蜂が飛ぶ) など

数は少ない。しかも、同じ例で繰り返し発話を求めると問題の下降がなかったりもし、上記①②のような頻用性、安定性には欠ける。いずれも後続文節は中央式で高く始まる系列であり、低接性の残存とは言い難い。これらは、下降のある直前の文節部分を取りたてて示そうとしたものではないかと思われる(「どの虹か—この」「欲しいのはどれか—これ」「飛ぶのは何か—蜂」)。

これに似た現象は、筆者は、電車の中や駅のホームでよく耳にする。

・チューオーセン, …ケーオーセンワ'オノリカエデス。

(中央線, …京王線はお乗り換えです。/山手線車内)

・ニバンセン'ゴチュ'ーイクダサイ。トーキョ'ーユキガ'マイリマス。

(二番線ご注意ください。東京行が参ります。/JR 川崎駅ホーム)

一種の業務口調である。それぞれ、乗り換えとなるのは「中央線以下京王線であること」、電車が入線するのは「二番線であること」、入線する電車は「東京行であること」を明示しているのである。ただし、文節末拍にプロミネンスが置かれたり、次の文節にアクセント的上昇のある場合もあるが、それらにとっては、単なる下がり目ではない。だが、プロミネンスが置かれた様子もなく、次の文節内にアクセント的上昇もない場合がある。それらにとっては、下降が、プロミネンスや句切れの力を借りずに、伝えたい部分を明確にする職能、すなわち句中のフォーカス位置明示機能を持つのだと考えられる。

安居島方言の場合も、この音調の出自については、同じように解釈できると思われる。つまり、当初プロミネンスのような形で出現し、やがて、下降だけでとりたてる部分を明示するようになったのではないかと思われる。従って、この現象は低接性とは区別される¹⁵。

しかしながら、これら一連の下降音調は、元々の成り立ちは異質なもの同士と思われるけれども、各々が出現率は少ないものの「共存している」ということに意味があると思われる。すなわち、例えば、聴覚印象の近似から、一方に低接性の現象があったからこそ③のような現象は存在しやすかったとも考えられる。

4.4. 体系と所属語彙

4.4.1. アクセント体系

これまでの調査で分かった型を中心にまとめる。1拍から4拍までを名詞を中心に示す。

いちばん左の列の「1-1-a.」「3-0-b.」などは、「拍数-核の有無・位置-句頭の上昇位置」を示す。ただし、a.の上昇位置は、2拍目からでもよい。「語例」の列の「-」は、当該の型の存在が予想されるものの、語形が見付かっていないもの。「単独」より右の列は各発話環境ごとの例。○○で示したものは、該当する例が見付かっていない／調査できていないもの。

	語例	単独	文節／短文	この～
1-0-a.	蚊	「カ	「カガ～	「コノカガ
1-1-a.	手	「テ	「テ'ガ～	「コノテ'ガ
2-0-a.	風	「カゼ	「カゼガ～	「コノカゼガ
2-2-a.	音	「オト”	「オト'ガ～	「コノオト'ガ
2-2-b.	—	「○○?	○○「ガ～	「コノ○○ガ
2-12-a.	犬	「イ'ヌ”	「○'○'ガ～	「コノ○'○'ガ
2-1-a.	雨	「ア'メ	「ア'メガ～	「コノア'メガ
3-0-a.	魚	「サカナ	「サカナガ～	「コノサカナガ
3-0-b.	とんぼ	トン「ボ	トン「ボガ～	「コノトンボガ
3-3-a.	鏡	「カガミ”	「カガミ'ガ～	「コノカガミ'ガ
3-3-b.	ノッポ	ノッ「ポ”	ノッ「ポ'ガ～	「コノノッポ'ガ
3-23-a.	娘・刀	「ムス'メ”	「カタ'ナ'ガ～	「コノ○○'○'ガ
3-2-a.	卵	「タマ'ゴ	「タマ'ゴガ～	「コノタマ'ゴガ
3-12-a.	☆	「○'○'○	「○'○'○ガ～	「コノ○'○'○ガ
3-1-a.	後ろ	「ウ'シロ	「ウ'シロガ～	「コノウ'シロガ
4-0-a.	鶏	「ニワトリ	「ニワトリガ～	「コノ○○○○ガ
4-0-b.	三年	サン「ネン	サン「ネンガ～	「コノ○○○○ガ
4-4-a.	二重眼	「フタエメ”	「フタエメ'ガ～	「コノ○○○○'ガ
4-4-b.	—	○○「○○”	○○「○○'ガ～	「コノ○○○○'ガ
4-34-a.	ろうそく	「○○○'○”	「ローソ'ク'ガ～	「コノ○○○'○'ガ
4-34-b.	—	○○「○'○”	○○「○'○'ガ～	「コノ○○○'○'ガ
4-3-a.	駅前	「エキマ'エ	「エキマ'エガ～	「コノ○○'○ガ
4-3-b.	一寸	イッ「スン	イッ「スンガ～	「コノ○○○○ガ
4-23-a.	編み物	「○○'○'○	「アミ'モノガ～	「コノ○○'○'○ガ
4-2-a.	紫	「ムラ'サキ	「ムラ'サキガ～	「コノ○○'○○ガ
4-12-a.	—	「○'○'○○	「○'○'○○ガ～	「コノ○'○'○○ガ
4-1-a.	コスモス	「コスモス	「コスモスガ～	「コノ○'○○○ガ

☆印…用言では、あくまで句中の形で「見える」(ミ'エル)、「痛い」(イ'タイ)などがある。

一見複雑なようだが、ちなみに、ここから、不安定で弁別性の劣る次の二要素、すなわち、句頭の a . b . のちがいと、過渡的な型と考えられる、12, 23などを差し引くと、「Pn = n + 1」の区

別を持つ体系となる。

4.4.2. 類別体系

なお、3拍までの類別語彙との対応は、概ね以下のよう。

1拍名詞 1・2類=0型/3類=1型

2拍名詞 1類=0型/2・3類=2型/4・5類=1型

3拍名詞 1・6類と7類の一部=0型/2・4類=3型(単独形中心に2型も)
/5類および7類の一部=2型/7類の一部=1型

2拍動詞終止形 五段・一段活用1類=0型/五段活用2・3類と一段活用2類=1型

3拍動詞終止形 五段・一段活用1類=0型

/五段活用2・3類と一段活用2類=2型中心

2拍形容詞終止形 1型のみ

3拍形容詞終止形 2型中心

東京方言や広島方言などの、いわゆる中輪式のものに似ている。

5. まとめ

以上のようなわけで、安居島方言アクセントでは、中央式アクセントに共通する現象や、中央式がその特徴を失う過程で生じたと考えられる特異な現象が種々の形でゆれとなって現れていることが多いが、そのゆれの要因が分かってくると、体系は、中輪式にきわめて近づいて見えてくるのである。

中央式の特徴に共通する現象が、体系の周辺部にあるということは、かつて中央式から中輪式への変化が起こり、それが今まだ完全には終了していないという見方が出来ると考えられるが、中央式からの変化ということは、結果的に、移住という史実とも符合するのである。

それにしても、移住のあった文化年間からこの話者の言語形成期を送った大正時代といえばたかだか100年ちょっとで、そのような短い時間で起こった体系変化というのは、かなり加速度的であったと考えられる。中央式に通じる特徴が散見される現在の状態は、ひとつに、体系変化が急激であったために、個々のレベルでの変化が完全に追いつききれなかったさまではないかと思われる。また変化が急激であったことは、一方で、一連の下降音調など、特異な現象が出現・定着する要因ともなったと考えられる¹⁶。

注

1 島の沿革は、『角川日本地名辞典38愛媛県』角川書店(1981,p.53)と、北条市ふるさと館長・竹田覚(たけださとる)氏、話者である岡井肇(おかいはじめ)氏からのご教示の内容をまとめた。

そのほか、行政区分としては、島の開墾が始まってからはずっと北条(愛媛県側)に属する。また、現在この島の唯一の交通手段は、北条の棧橋との間を一日一往復(水・土・日および夏期は二往復)、約40分で結んでいる郵便船であるが、この航路の運航開始時期については、正確には不明だが、

およそ島が開かれた頃から生活物資を運ぶための船が、北条との間を往き来したらしいという。現在のような通信輸送もかねるようになったのは、昭和に入ってから。なお、定期航路は、島の有史以来北条との間だけ。

- 2 いいわけがましいが、当初12月18日に臨地調査をお願いしていたのだが、定期船のドック入りの影響で、日帰りできる便が欠航となったため不可能となってしまったのである。この分については、調査票への記入のみで、テープによる記録がない。
- 3 2拍名詞については、下げ核の位置で対応していない例が多く、松山などでL0型の語では、わずかに「盆」が当方言でも0型である。「盆」の文節・短文形は、b.では出なかった。
- 4 b.の高い部分は、概ね、短文形では少なくともそれを含む文節内では下降の位置（あるいは文節末）まで自然下降が禁止されているようだ（それなら、音調の向きに文節がある程度関わっているということになる）が、単独形や文節形では大多数が自然下降しているときこえる。ただし、これらは調査時にそこまで注意して聴いていなかったため、後にテープに収めたデータの中から判断したものである。
- 5 「1. はじめに」に触れたように、安居島に移住した人々の中でも浅海出身者は下難波とともに多くの割合を占めており、現在の安居島のアクセントが浅海アクセントと同じ祖形を基盤として成ったことは、十分考えられる。以下、浅海方言アクセントの要点をまとめる。浅海のアクセントをご教示頂いたのは、庭瀬軽子（にわせかるこ）氏（大正4年生まれ）、西本セキ子（にしもとせきこ）氏（大正11年生まれ）のご姉妹。

浅海方言のアクセントは、地理的に見て、松山市方言と似ていることが予想され、実際に似ている面が多いが、注目すべき次のような特徴がある。

- ・3拍名詞2・4類が、松山市のようにH1型で5類と統合してはならずH2型で、H1型の5類と対立している。
- ・2拍名詞2・3類は、数的にはH1型が多いが、H2型やL2型で実現されるものがある。
- ・3拍名詞5類の中には、L2型で出るものもいくつか見られる。

2拍名詞2・3類については、H2やL2で出た場合でも、繰り返し発話を求めるとH1型で実現される語もあり、また、あまりしつこく尋ねると、話者の方でも混乱してくるのか、H0やL0型で実現されることもあった。なお、注1の竹田氏によれば、浅海のアクセントは北条市の中でも特異であり、例えば、自分たちは「馬」は[「ウ'マ」]だが、浅海の人たちは、[「ウマ」]だという内省をされた。

また、式は、H=平進式、L=低接上昇式（上野善道（1995）による）と捉えられる。

- 6 ちなみに、各環境ともに2型で安定して出る語は、類別語彙では、5類と、7類の一部の語。その外に、「垣根、詐欺師、花火」など「2拍+1拍」の語構成の語と、「小道、地元、二隻」など「1拍+2拍」の語構成の語とが大半を占める。
- 7 結果的に語末核回避。東京方言のA型B型の問題として有名な「尾高型が嫌われる」傾向と結果は一致する。

また、中井幸比古（1991,p.3）で考察されている丹波地方での変化の例にパターンとしては同じと考えられる。

3拍名詞の文節末核回避には、核が前にズレる変化があるという点で、2拍名詞とは異なる。その通時的な理由としては、ひとつに、句頭音調の出方との関係があると思われる。

中井幸比古（1990, p.6,14）によれば、2型に核が前にズレる変化が起こる地域では、[○「○」]ではなく、[「○○」]だという。当方言では、句頭から高く始まる音調が多く聴かれるが、2拍目

から上昇する型もある。これは、3拍名詞に核が前にズレる変化が起こりはじめる前に、句頭では、特定の音配列の時以外は上昇性を失い、その際残った上昇性は3拍目(2拍名詞では助詞部分)からのものであったため、句頭1拍目の低下も許せるものとなった。この句頭1拍目の低下が可能であるという状況によって、2拍名詞では、核が前にズレる変化は必然的に阻止される形になったのではないかとと思われる。

- 8 「蛤」も語源は「浜+栗」か。『日本国語大辞典』縮刷版第一版第八刷(1988)によれば『和名類聚抄』では「浜栗」とある。またこの貝は、貝殻の色や形が栗に似ていることから語源俗解が容易と思われる。
- 9 「～十月」は、相澤正夫(1996, p.691)での東京語では尾高型安定度の高い例として挙げられている。
- 10 話者の内省では、例えば、「苺がとれる」は、自分たちの言葉は【イチゴガトレル】であり、北条の孫の発音が【イチゴガト'レル】だという。
- 11 遠江でのこれと似ていると思われる現象を扱った山口幸洋(1963, p.282)では「過渡的なもの」と捉えることは否定的に述べられている。
- 12 同様の現象は、後部4拍語では、【サンキン'コータイ】(参勤+交代)、【ヒナ'ニ'ンギョー】(雛+人形)、【ブッキョー'ダイガク】(仏教+大学)の例がある。なお、似た現象は、筆者の場合、東京でも聞くことがある。例えば、京王線「桜上水」駅について、【サク'ラ'ジョー'スイ~サク'ラ'ジョー'スイ】と発音している掛員の方が意外に多かったりする。
- 13 愛媛県では、南予(なんよ)地方で同様の現象がある。南予地方の場合は、低接性との関連がありそうだが、安居島の場合、低接性との関係はここに集めたデータを見る限りはなさそうである。本稿の分析では、結果的に最初の下降を下げ核とは別のものと捉える処理をしたが、例えば、「爪+楊枝」など、【ツマ'ヨージ】の後ろの下降が薄れ(きき取りにくく)、前の下降が際立って【ツマ'ヨージ】になる(そうきこえる)という具合に、あるいは下げ核に影響を与えていることも考えられ、そうすると、下げ核と全く別に考えてしまうわけにはいなくなる。下げ核との区別は、聴覚印象の近似からも曖昧である。この現象については、なお慎重に吟味する必要がある。
- 14 ちなみに、筆者は、関西でのこの現象を「アイフルお自動さん」のTVCM(「アイフルにお自動さん言うのが居るらしいで。»)により知った。松山周辺については不明。ただ、浅海の話者からは観察した範囲では聴かれなかった。一方、南予の宇和島では聴かれる現象である。なお、残念ながら「と」付きの形では尋ねていない。また、中央式で低接の「も」はこの方言では低接しないようである。
- 15 この解釈は、山口幸洋(1987)で「考えられなくはない」とされている「強調表現的な分断調からの変化で習慣的型として化した」との解釈に大枠は同じと思われる。ところで、中井幸比古(1996, p.400)によると、関西の中央式アクセントでは、「アケテ'ソノハコ」のように倒置の文において、本来高起の文節が低接する現象の報告と考察がある。ここは、不覚にも中井氏のご研究を知らずに分析してしまったものだが、①②の低接性などと同様に、中央式アクセントの特徴との関係という視点から見れば、関連があるかもしれない。
- 16 このような急激な変化が起こった背景については、孤島という性格上、内的に自律変化が起こりやすかったことに加え、海上交通の要衝であった瀬戸内海上に位置するという性格上、外的にも何か要因があった可能性も考えられる。ただし、この方言アクセントに見られる諸特徴が、これまでみてきたように複雑な内容のものが多いということから考えると、外的な要因(異体系との接触)があるとすれば、もともと基盤にあった「中央式→中輪式」という変化に、起爆剤あるいは促進剤として弾みをつけたのであって、それが決定的な要因となって働いたわけではないよう

に思われる。ともあれ、通時的な考察は、類別語彙の所属語彙の対応からの分析なども含めて、個人差・世代差ともども今後の課題としたい。

参考文献

- 相澤 正夫 (1996) 「尾高型アクセントの現在位置—『東京語アクセント資料の分析』—」『言語学林1995-1996』三省堂, 683-695
- 秋山 英治 (1996) 「松山市方言における3拍名詞のアクセント」『愛媛国語学研究』2, 51-72
- 上野 善道 (1992) 「『峯ヶ塚古墳』のアクセント」『月刊言語』大修館書店21-6, 54-55
- 上野 善道 (1995) 「松山市方言のアクセント調査報告」『愛文』30, 1-30
- 上野 善道 (1996a) 「宇部市方言の複合名詞のアクセント(2)」『金沢大学日本海域研究所報告』27, 115-152
- 上野 善道 (1996b) 「金沢方言の後部3拍複合名詞のアクセント規則」『言語学林1995-1996』三省堂, 337-355
- 亀田 裕見 (1994) 「自由変異体の多い方言音調の構造的記述」『国語学』179, 26-39
- 中井 幸比古 (1990a) 「大学生のアクセント(1)—近畿地方の中央式諸方言について—」『香川大学一般教育研究』38
- 中井 幸比古 (1990b) 「京都府におけるいわゆる垂井式アクセントについて(1)」『国語研究』54, 1-28
- 中井 幸比古 (1991) 「京都府におけるいわゆる垂井式アクセントについて(2)」『国語研究』55, 1-20
- 中井 幸比古 (1996) 「京阪アクセントにおける低接非上昇調について」『神戸市外大論叢』47, 395-417
- 山口 幸洋 (1959) 「静岡県入出方言と/OOO=ɿ/型アクセントについて」『音声学会会報』101, 8-10
- 山口 幸洋 (1963) 「静岡県春野町方言アクセントに見られる“くぎりの下降”について」『音声の研究』10, 8-10
- 山口 幸洋 (1972) 「奥三河の特徴的アクセント」『豊橋地方の方言』豊橋文化協会, 303-306
- 山口 幸洋 (1987) 「伊東市新井のアクセント」『音声学会会報』184, 5-7
- 山口 幸洋 (1996) 「方言アクセントにおける『文節末下降』について」『第10回日本音声学会全国大会予稿集』, 41-46

付 記

安居島調査では、話者の岡井肇氏をはじめ、奥様のマサ子氏、娘さんの村上澄子氏に大変お世話になりました。また、話者の岡井氏をご紹介頂いた岡井操氏をはじめ、島の方々にも色々とお世話になりました。浅海調査では、話者の庭瀬軽子氏と西本セキ子氏をはじめ、庭瀬泉氏にお世話になりました。北条市ふるさと館長の竹田覚氏には、安居島の歴史をご教示頂きました。お礼申し上げます。本誌査読委員の先生方には、いいかげんな点や不備な点等を詳細に指摘して頂き、また助言して頂きました。英文概要の作成の際は、東京都立大学院生の田中江扶氏にご教示頂きました。お礼申し上げます。但し、いずれも最終的には筆者の独断が絡んでおり、不備や不適當なところは、筆者の責任に帰せられるものです。

(原稿受理日：1997年1月20日)

清水 誠治 (しみず まさはる)

東京都立大学大学院博士課程 210 川崎市川崎区日進町6-1-310

Aijima dialect accent

SHIMIZU Masaharu

Tokyo Metropolitan University graduate student

Keywords

the dialects of Setouchi islands , Aijima, accent,
the accent system of Churin-type and Chuo-type

In this paper we focus on the dialect accent peculiar to Aijima, a part of Hojo City, Ehime Prefecture. In particular, we investigate in detail interesting phenomena, such as the change of the Odaka accent type, and the rarely observed falling tone.

We conclude that a shift in the Aijima dialect accent system from the Chuo-type to the Churin-type began previously, and that this shift, not yet completed, is still in progress. We further demonstrate that this change is consistent with historical evidence that an immigration occurred from Hojo to Aijima.